

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32702

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12793

研究課題名（和文）フランス現象学の領域横断的展開を踏まえた対話の哲学の系譜学的再編

研究課題名（英文）A Genealogical Restructuring of the Philosophy of Dialogue in Light of the Cross-Disciplinary Development of French phenomenology

研究代表者

佐藤 香織（SATO, Kaori）

神奈川大学・国際日本学部・非常勤講師

研究者番号：50839404

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、フランス現象学とドイツユダヤ思想の架橋を試み「対話の哲学」の見直しを行った。研究期間中にはレヴィナス、デュフレンヌ、ローゼンツヴァイク、リクールその他に関する、現象学会、実存思想協会、日仏哲学会その他の諸研究会における口頭発表、論文発表及び複数の共著出版といった業績を挙げることができた。とりわけ著作『個と普遍』『レヴィナス読本』『戦うことに意味はあるのか』『見ることに言葉はあるのか』に執筆したレヴィナスとローゼンツヴァイクに関する諸論考は本研究の中心となる。これらを通じて、直接的な対面に限定されることのない対話を思考し、空間および時間の形式を再解釈することに寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、20世紀初頭のドイツユダヤ思想を特徴づけるとされてきた「対話の哲学」について、フランス現象学、とりわけレヴィナスの議論から光を当てることにより、西洋哲学史の見方に新たな展開を与えることにある。その社会的意義としては、「対話」の内実が無批判的もしくは素朴な時間・空間形式のもとで捉えられることが多い現状において、「対話」の条件自体を問いつつ「対話」の意義を刷新することから、教育学や倫理学といった隣接する領域に貢献するという生産性を有している。

研究成果の概要（英文）：In this study, I reviewed the "philosophy of dialogue" in an attempt to bridge French phenomenology and German Jewish thought. During the course of this research, I was able to make oral presentations, present papers, and co-author several publications on Levinas, Dufrenne, Rosenzweig, Ricoeur, and others at various research conferences, including the Phenomenological association of Japan, Japanese Society of Existential Thought, and Society french-japanese of philosophy. In particular, my essays on Levinas and Rosenzweig in books "The Individual and the Universal," "The Levinas Reader," "Is There Meaning in Fighting? and "Is There Language in Seeing?" are central to this study. Through them, I have contributed to thinking about a dialogue that is not limited to face-to-face dialogue and to reinterpreting the forms of space and time.

研究分野：西洋哲学

キーワード：フランス現象学 ドイツユダヤ思想 レヴィナス ローゼンツヴァイク

様式 C-19、F-19-1(共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として、第一に20世紀の「対話の哲学」の思想史の再編の必要性を挙げる。「対話の哲学」とは、B. カスパーが1966年の著作でF. ローゼンツヴァイク、F. エプナー、M. ブーバーといった20世紀前半のドイツ思想を総称したものである。現在フランス、英米語圏、日本の各国の研究状況において「対話の哲学」の内実およびこの哲学が置かれる思想史的背景はそれぞれ異なり、しばしばフランス現象学者E. レヴィナスの思想も「対話の哲学」に加えられる。これらの研究において、「対話」は人間学および倫理学の領域で、人格的なものどうしの直接的かつ現在の出来事を示す出来事とみなされる傾向がある。しかしドイツ・ユダヤ思想とフランス現象学を相互照射すると、実際には時間と空間の形式の再解釈が「対話の哲学」の条件をなしていると気づく。こうして現在、「対話の哲学」の未だ説明されていない意義を見出すべく、超越論的感性論における時間と空間の形式を問い直すことが要請されている。

第二の背景として、時間論および空間論から20世紀の対話論の再編を目指す試みは、既にフランス現象学に関わる研究のうちに部分的に見られること、とりわけ国内外におけるレヴィナス研究およびその関連研究の蓄積が、広い射程を持つ本研究を可能にするまでに成熟しているという事実を挙げる。本研究に関わりの深いものとして、たとえばフランスにおけるG. ベンスーサンの研究を、対話の問題を主題的に扱ってはいないが、ドイツ観念論、ユダヤ思想、フランス現象学を貫く時間論の見直しをはかるものとして挙げるができる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、対話の問題が位置する哲学的領域を、超越論的感性論すなわち時間・空間の形式についての議論が含む問題に見出し、フランス現象学の知見をもとに「対話」の哲学的意義を問い直したうえで、「対話」の思想史を見直すことである。

3. 研究の方法

本項目は、これまでの申請者の研究のうちでも1年次の計画に次いで蓄積があり、かつさらなる研究を必要とする部分であって、1年次の計画と一部並行しつつ行う。ローゼンツヴァイクが聖書翻訳時にブーバーとやりとりをした書簡およびその前後の時期の諸論考の検討を通じて、これまでレヴィナス研究において軽視されがちであった「物語」概念を照射し、それとともにレヴィナスの「倫理」とされてきた、「直接的対面」としての「対話」が、実は時間的、空間的隔たりを持つ人々の間でも成り立つという観点から捉えることが可能になる。本計画に関わる一連の成果を関連する学会(京都ユダヤ思想学会、実存思想協会ほか)で発表し、申請時以前の研究と連続性のある研究としてまとめる。

①レヴィナス哲学においてユダヤ的源泉を有する時間論が果たす役割の画定

レヴィナス研究は現在、大量の研究蓄積の十全な利用に関する整理および特に重要な二次文献の邦訳を必要としている。この状況を受けて、申請者はレヴィナス、ローゼンツヴァイク双方の専門家でありカント研究者でもある C. シャリエの難解かつ重要な著作『無限者の痕跡：レヴィナスのヘブライ的源泉』の邦訳の完成と出版を目指す。申請者は既にこの翻訳を進めているが、ヘブライ語およびユダヤ思想の専門家の助けも借り、また資料調査およ

び著者への質問も必要に応じて行いつつこの著作の翻訳を完成させ、その内容に基づいてレヴィナス哲学におけるユダヤ的時間論が超越論的感性論に対して有する意義を画定する。

②ブーバー-ローゼンツヴァイクの聖書翻訳のうちで提示された、時間的・空間的に隔たる人々との「対話」の可能性の検討

本項目は、これまでの申請者の研究のうちでも1年次の計画に次いで蓄積があり、かつさらなる研究を必要とする部分であって、1年次の計画と一部並行しつつ行う。ローゼンツヴァイクが聖書翻訳時にブーバーとやりとりをした書簡およびその前後の時期の諸論考の検討を通じて、これまでレヴィナス研究において軽視されがちであった「物語」概念を照射し、それとともにレヴィナスの「倫理」とされてきた、「直接的対面」としての「対話」が、実は時間的、空間的隔たりを持つ人々の間でも成り立つという観点から捉えることが可能になる。本計画に関わる一連の成果を関連する学会で発表し、申請時以前の研究と連続性のある研究としてまとめる。

③レヴィナスの思想を含むフランス現象学のうちでの時間・空間の形式の変容の検討

本項目では、レヴィナス、P.リクール、M.デュフレンヌの哲学をもとに、いかなる時間・空間の形式の変容が「対話」の議論を支えるかを検討する。本項目は多くの内容を含むため、3年次の発表を目指して、申請者のこれまでの研究の蓄積を生かして1、2年次に準備作業を行っておく。レヴィナスに関しては後期の重要概念「ディアクロニー」および「非場所」概念に関する重要文献を整理し、本研究の目的と照らし合わせて、レヴィナスが述べる「時間の脱形式化」に関わる諸研究を検討しておく。さらに、申請者がレヴィナス研究を起点として本研究の達成のために必要であると考え二つの議論を検討する。

第一に、P.リコールの諸論考における「自己を物語ること」および「証し」についての思考が対話論に対して果たす役割、そしてレヴィナスの「証言」についての思考への応答を、時間論的視点から再検討する。現象学とカントのそれぞれの時間論という、レヴィナスが明示的な仕方では主題化しなかった問題をリクールおよび先行するリクール研究の助けを借りつつ整理したうえで、時間の脱形式化に基づく対話論の基盤をつくる。

第二に、M.デュフレンヌ『美的経験の現象学』（1953）におけるア・プリオリ概念、および英訳にリクールが序文を寄せ、レヴィナスもまた書評を寄せた『ア・プリオリの概念』（1959）に着目する。デュフレンヌの哲学は現在日本での先行研究がほぼない状態であるが、申請者は、弘前大学出版会で既に2冊が出版されている、「倫理」「政治」「認識」「美学」を主題とする4部作の論集企画に第2論集（業績④）から参加しており、第4論集『見ることに現実はあるのか』（仮）では編者かつフランス思想担当としてデュフレンヌに関する論文を寄稿する予定である。その構想発表会ではデュフレンヌが分析する「作品」と「鑑賞者」の「間主観性」の問題に、初期のレヴィナスが探求することを断念した人間観を見出した。本研究にとって、レヴィナスの「人間」どうしの「対話」との比較のもとでデュフレンヌの「美的経験」を検討すること、またその際にカント哲学に対してデュフレンヌが提示する「ア・プリオリ」概念が果たす役割を正確な仕方で捉えることは、「対話」の射程を思考する際に必要な過程である。

④フランス現象学とドイツ・ユダヤ思想における「対話」の議論の相互照射

以上、3年次までの作業を通じて「対話の哲学」およびフランス現象学における時間と空間の形式を問い直したうえで、「直接的対面」に汲み尽くされることのない「対話」の射程を示し、20世紀の「対話の哲学」としてこれまで提示しされてきた枠組みを新たな観点から組み直すことを最終的な目標とする。3年次までの研究の軸の一つには、ローゼンツヴァイクが主著や関連論考、E.ローゼンシュトックやブーバーとの往復書簡、「ユダヤ自由学院」設立への寄与と教育活動、聖書翻訳を経て辿り着いた、テキストを通じて可能になる「秘密の対話の網」という概念の精査があり、もう一つには、後期レヴィナスにおける「時間の脱形式化」概念を、ユダヤ思想および同時代のフランス現象学との関連のもとで明確にしたうえで「対話」の内実を思考する作業がある。4年次には、これらを一連のまとまりのある研究として「時間・空間形式の脱形式化に基づく対話論の思想史」として提示する。

4. 研究成果

①について、全訳が終わり、出版社とやりとりを重ねて現在校正中である。

②について、以下の成果をあげた。

1. 共著『見ることに言葉はあるのか——ドイツ認識論史への試み』弘前大学出版会、2023年、嶺岸佑亮・増山浩人・梶尾悠史・横地徳広・馬場智一・佐藤香織
(分担)第10章「ローゼンツヴァイクのコーエン論におけるハイデガー——「入れ替えられた前線」を起点として」pp. 273-304.
2. 共著 同書(分担)第12章「ローゼンツヴァイクと聖書物語——「本質認識」批判としての「語る思考」」pp. 331-362.
3. 共著『戦うことに意味はあるのか[増補改訂版]——平和の価値をめぐる哲学的試み』弘前大学出版会、2023年、佐藤香織・遠藤健樹・横地徳広・宮村悠介
(分担)コラム3「フランツ・ローゼンツヴァイクと第一次大戦」pp. 199-208.
4. シンポジウム 提題「ローゼンツヴァイクのコーエン論におけるハイデガー——「入れ替えられた前線」を起点として」実存思想協会研究会シンポジウム 2022年3月13日
5. 論文「ローゼンツヴァイクとレヴィナス——聖書を読むことと〈対話〉」『京都ユダヤ思想』11号、2020年、pp. 151-169.

③について、以下の成果をあげた。

1. 口頭発表「リクールにおける無神論の媒介的位置づけ——リクール「宗教、無神論、信仰」の読解」2023年3月日仏哲学会一般研究発表
2. 論文「デュフレンヌにおける美感的還元」『フランス哲学・思想研究』(26) pp. 191-201. 2021年9月
3. 論文「デュフレンヌ『美感的経験の現象学』における「準-主観」の問題」『実存思想論集』(36) pp. 115-131. 2021年6月
4. 口頭発表「ミケル・デュフレンヌにおける「準-主観」——デュフレンヌ『美的経験の現象学』における「作品」と「鑑賞者」」実存思想協会 2020年11月
5. 口頭発表「美的対象の存在論——ミケル・デュフレンヌを手掛かりに」現象学会 2020年11月

④について、以下の成果をあげた。

1. ワークショップ口頭発表「Ich bin schon da」 et « Me voici » ——L'interprétation de l'identité chez Heidegger et Levinas——「私はすでにここにいる (Ich bin schon da)」と「われここに (Me voici)」：ハイデガーとレヴィナスの同一性解釈について」 ジョスラン・ブノワ氏 特別セミナー／講演会 (レヴィナス協会主催)、2024年3月3日
2. 研究会口頭発表「集合的記憶と尊厳——東日本大震災の被災地の記録を通じて」 学術変革領域 A「尊厳学の確立: 尊厳概念に基づく社会統合の学際的パラダイムの構築に向けて」 尊厳学フォーラム A02 班研究会「尊厳と感情—集合的記憶の喪失と美的感情の観点から」、2024年1月26日
3. 研究会口頭発表「同一性批判の諸相 —ローゼンツヴァイク『救済の星』の原細胞から レヴィナス『全体性と無限』へ」、第35回哲学論集研究会、2024年1月21日
4. 共著『哲学を創造する ひとつおもしろい5』 木田 直人(編), 鈴木 泉(編), 乗立 雄輝(編), 松永 澄夫(編) 東信堂、2023年
(分担) 「生の基盤としての信頼—懐疑的態度への抵抗—」 pp. 33-52
5. 共著『戦うことに意味はあるのか[増補改訂版]——平和の価値をめぐる哲学的試み』(前掲書) (分担) 第5章「ラルフ・W・エマソン『偉人の効用』訳と解題」 pp. 151-198.
6. 同書 (分担) 第6章「戦争」に先行する「平和」——レヴィナス『全体性と無限』における「平和」概念の二義性から」 pp. 209-246.
7. シンポジウム口頭発表 「〈離散〉を意味づける集合的記憶」 東京大学東アジア藝文書院、哲学論集研究会 (弘前大学西洋倫理思想史研究室)、第22・23回哲学論集研究会 EAA シンポジウム「香港、福島、水俣、その思索的巡礼」、2023年3月2日
8. 共著『レヴィナス読本』レヴィナス協会、法政大学出版局、2022年、
(分担) 第II部基本概念「女性的なもの」、p. 30
9. 同書 (分担) 第III部著作解題『タルムード四講話』 pp. 118-119.
10. 同書 (分担) 第IV部開かれるレヴィナス「レヴィナスとユダヤ思想」 pp. 206-215.
11. 共著 『共創のためのコラボレーション UTCPブックレット15』 (分担) 「〈敵対者〉と〈対話者〉」 pp. 102-105 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 共生のための国際哲学研究センター
12. 書評論文「創造」の具体化——渡名喜庸哲氏『レヴィナスの企て』の読解 『レヴィナス研究』第4号、2022年、pp. 75-90.
13. 共著『個と普遍——レヴィナス哲学の新たな広がり』法政大学出版局、2022年
(分担) 「〈われわれ〉の存在論」 pp. 322-343.
14. 合評会提題：「レヴィナスにおける形而上学的問いについて」 渡名喜庸哲『レヴィナスの企て』(勁草書房)合評会、レヴィナス協会／哲学論集研究会第2回、2021年8月7日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐藤香織	4. 巻 4
2. 論文標題 「創造」の具体化ー渡名喜庸哲氏『レヴィナスの企て』の読解	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 レヴィナス研究	6. 最初と最後の頁 75-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐藤香織	4. 巻 15
2. 論文標題 敵対者 と 対話者	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共創のためのコラボレーション UTCPブックレット	6. 最初と最後の頁 102-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐藤香織	4. 巻 26
2. 論文標題 デュフレンヌにおける美感的還元	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 191-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐藤香織	4. 巻 2
2. 論文標題 「レヴィナスとローゼンツヴァイクにおける「物語」の問題」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『レヴィナス研究』	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤香織	4. 巻 36
2. 論文標題 「デュフレンヌ『美感的経験の現象学』における「準-主観」の問題」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『実存思想論集』	6. 最初と最後の頁 115-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤香織	4. 巻 11
2. 論文標題 ローゼンツヴァイクとレヴィナス：聖書を読むことと 対話	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都ユダヤ思想	6. 最初と最後の頁 151-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤香織
2. 発表標題 離散 を意味づける集合的記憶
3. 学会等名 東京大学東アジア藝文書院、哲学論集研究会（弘前大学西洋倫理思想史研究室）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐藤香織
2. 発表標題 リクールにおける無神論の媒介的位置づけ
3. 学会等名 日仏哲学会2023年春季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐藤香織
2. 発表標題 ローゼンツヴァイクのコーエン論におけるハイデガー：「入れ替えられた前線」を起点として
3. 学会等名 実存思想協会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤香織
2. 発表標題 ミケル・デュフレンヌにおける「準・主観」 - - デュフレンヌ『美的経験の現象学』における「作品」と「鑑賞者」
3. 学会等名 実存思想協会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤香織
2. 発表標題 「美的対象の存在論 - - ミケル・デュフレンヌを手掛かりに」
3. 学会等名 現象学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤香織
2. 発表標題 「私はすでにここにいる (Ich bin schon da)」と「われここに (Me voici)」：ハイデガーとレヴィナスの同一性解釈について」
3. 学会等名 レヴィナス協会主催ジョスラン・ブノワ氏特別セミナー / 講演会ワークショップ発表 (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 佐藤香織
2. 発表標題 「集合的記憶と尊厳 東日本大震災の被災地の記録を通じて」
3. 学会等名 学術変革領域 A「尊厳学の確立:尊厳概念に基づく社会統合の学際的パラダイムの構築に向けて」 尊厳学フォーラムA02班研究会（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 レヴィナス協会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 368
3. 書名 レヴィナス読本	

1. 著者名 佐藤香織・遠藤健樹・横地徳広・信太光郎・宮村悠介	4. 発行年 2023年
2. 出版社 弘前大学出版局	5. 総ページ数 334
3. 書名 戦うことに意味はあるのか [増補改訂版] 平和の価値をめぐる哲学的試み	

1. 著者名 杉村靖彦・渡名喜庸哲・長坂真澄・馬場智一・佐藤香織他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 422
3. 書名 個と普遍：レヴィナス哲学の新たな広がり	

1. 著者名 嶺岸佑亮・増山浩人・梶尾悠史・横地徳広・馬場智一・佐藤香織・千田芳樹	4. 発行年 2023年
2. 出版社 弘前大学出版会	5. 総ページ数 477
3. 書名 見ることに言葉はいるのか	

1. 著者名 木田 直人(編), 鈴木 泉(編), 乗立 雄輝(編), 松永 澄夫(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 244
3. 書名 哲学を創造する ひとつおもしろい5	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------